

主体的・対話的で深い学びを実現した総合的な学習の  
時間のカリキュラム・マネジメントに関する事例研究

—小3「詩のボクシング」の実践の検証を通じて—

白 井 克 尚  
行 田 臣

愛知東邦大学

# 主体的・対話的で深い学びを実現した総合的な学習の時間のカリキュラム・マネジメントに関する事例研究

## 一小3「詩のボクシング」の実践の検証を通じてー

白 井 克 尚\*  
行 田 臣\*\*

### 目 次

1. はじめに
2. 小学校での総合的な学習の時間の可能性
  - (1) 主体的・対話的で深い学びの視点から
  - (2) カリキュラム・マネジメントの視点から
3. 小学校での総合的な学習の時間におけるカリキュラム・マネジメントの実践  
    一小3「詩のボクシング」の実践を事例としてー
  - (1) 実践の計画 (P)
  - (2) 実践の実際 (D)
  - (3) 実践の評価 (C)
  - (4) 実践の改善 (A)
4. 小学校での総合的な学習の時間において主体的・対話的で深い学びを実現するために
  - (1) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けて
  - (2) カリキュラム・マネジメントの方略
5. おわりに

### 1. はじめに

今回の学習指導要領の改訂では、総合的な学習の時間<sup>1)</sup>において、「社会に開かれた教育課程」「育成を目指す資質・能力」「アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善」「主体的・対話的で深い学び」「カリキュラム・マネジメント」などを進めるという考えが強く打ち出された。しかし、このような考え方は、決して目新しいものではない。元来、平成10年度の答申を受けて創設された総合的な学習の時間は、「生きる力」の育成をめざし、「横断的・総合的な指導を行うこと」や「各学校が創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開できるようにする」ことが提言されていた。また、平成20年度の改訂の際にも、「育てようとする資質や能力及び態度」を明確にすることや、従来から示されていた「探究的な学習」や「協同的」に取り組む態度を育てることが示されていた。こうした基本的な考え方に立って、とりわけ小学校の現場では、貴重な総合

\* 愛知東邦大学教育学部

\*\* 豊橋市立幸小学校

的な学習の時間の実践が積み重ねられてきた。本稿では、そのような過去の総合的な学習の時間の実践の中から、「主体的・対話的で深い学び」を象徴的に実現した実践事例に学び、現在や将来の総合的な学習の時間の「カリキュラム・マネジメント」に関して示唆を得ることをめざしている。

とりわけ、本稿では、小学校での総合的な学習の時間における「主体的・対話的で深い学び」「カリキュラム・マネジメント」という二つの視点に着目する。まず、小学校での総合的な学習の時間における「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、学級担任として子どもたちの「深い学び」を看取る視点が一層重要になってくる<sup>2</sup>。小学校での総合的な学習の時間を通して、いかなる「資質・能力」<sup>3</sup>の育成をめざすのか。学級担任としての小学校教師は、そのような視点を持ち実践に取り組むことが重要となるだろう。また、小学校での総合的な学習の時間における「カリキュラム・マネジメント」を実現するためには、学級単位でカリキュラムの自由や独自性を保証する必要がある。とりわけ、学級担任としての小学校教師が、カリキュラムのユーザーになるだけでなく、学級の子どもたちの実態や地域の実情をふまえ、カリキュラムのデザイナーや評価者となり、カリキュラムの改善に関わっていくことが重要となるであろう<sup>4</sup>。

したがって、小学校での総合的な学習の時間における「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、「カリキュラム・マネジメント」を進展していく学級担任の教師個人の力量の問題も問われることになる。そうした教師個人の力量を高めていくための一つの方略として、過去の「主体的・対話的で深い学び」を実現した総合的な学習の時間の実践事例に学ぶ必要がある<sup>5</sup>。そこで、本稿では、過去の「主体的・対話的で深い学び」を象徴的に実現した小学校での総合的な学習の時間の「カリキュラム・マネジメント」の実践事例を紹介し、その達成要因を分析的に明らかにし、現在や将来の総合的な学習の時間の「カリキュラム・マネジメント」のあり方に一助の示唆を得たい。

## 2. 小学校での総合的な学習の時間の可能性

### (1) 主体的・対話的で深い学びの視点から

今次の学習指導要領改訂では、小学校での総合的な学習の時間の目標として、以下の点が述べられている。

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次の通り育成することを目指す。

- (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。
- (2) 実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。
- (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極

的に参画しようとする態度を養う<sup>6</sup>。

このような目標に沿いながら、小学校での総合的な学習の時間では、「探究的」なテーマを設定し、カリキュラム・マネジメントを行っていくことが求められよう。本稿では、これまでに組み込まれた小学校での総合的な学習の時間における「探究型」の実践を取り上げ、検討していくこととする。「探究的」なテーマに基づく小学校での総合的な学習の時間の実践は、学級担任レベルでできる「カリキュラム・マネジメント」を典型的に示していると考えられるからである。

## (2) カリキュラム・マネジメントの視点から

また、今次の学習指導要領改訂では、小学校での総合的な学習の時間における指導計画の作成と内容の取り扱いについては、以下のように述べられている。

### 指導計画の作成と内容の取扱い

1 指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

- (1) 年間や、単元など内容や時間のまとまりを見直して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、児童や学校、地域の実態等に応じて、児童が探究的な見方・考え方を働かせ、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習や児童の興味・関心等に基づく学習を行うなど創意工夫を生かした教育活動の充実を図ること。
- (2) 全体計画及び年間指導計画の作成に当たっては、学校における全教育活動との関連の下に、目標及び内容、学習活動、指導方法や指導体制、学習の評価の計画などを示すこと。
- (3) 他教科等の目標及び内容との違いに留意しつつ、第1の目標並びに第2の各学校において定める目標及び内容を踏まえた適切な学習活動を行うこと。
- (4) 他教科等の目標及び内容を踏まえた適切な学習活動を行うこと。
- (5) 各学校における総合的な学習の時間の名称については、各学校において適切に定めること。
- (6) 障害のある児童などについては、学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行うこと。
- (7) 第1章総則の第1の2の(2)に示す道徳教育の目標に基づき、道徳科などとの関連を考慮しながら、第3章特別の教科道徳の第2に示す内容について、総合的な学習の時間の特質に応じて適切な指導をすること<sup>7</sup>。

ここで強調されているのは、学校経営をふまえ、教育目標や、学校組織、学校文化、家庭・地域社会等の視点を有した「カリキュラム・マネジメント」<sup>8</sup>の視点の重要性である。しかし、先述したような教師個人の力量形成に関わって考えると、学校経営からの視点だけでなく、学級レ

ベルでのミクロな視点からの「カリキュラム・マネジメント」の取り組みについても、今後の研究の進展が一層求められることになるだろう<sup>9</sup>。そのように考えると、小学校での総合的な学習の時間における学級担任レベルでの「カリキュラム・マネジメント」の成果や実現可能性を、実践の検証を通じて引き続き検討していくことが必要である。

以上のような問題意識にしたがい、本稿では、「主体的・対話的で深い学び」を象徴的に実現した小学校での総合的な学習の時間における「カリキュラム・マネジメント」に関わる実践として、T市立N小学校において取り組まれた小3「詩のボクシング」の実践<sup>10</sup>を事例として取り上げ、その達成要因を分析的に明らかにし検証を行うこととする。

本実践を取り上げる理由は、以下の三点からである。第一に、抽出児の変容を追いながら単元を展開する「カリキュラム・マネジメント」が行われており<sup>11</sup>、報告された子どもの姿が、「主体的・対話的で深い学び」を実現しているにとらえられる点である。第二に、「主体的・対話的で深い学び」を実現した教育実践として、県の教育研究集会においても「カリキュラム・マネジメント」（教育課程編成）に関する報告がなされ、評価がある程度定まっている点である。第三に、実践記録が丁寧に残されており、実践者本人からの聞き取りも可能で、実践の検証が可能であると捉えられる点である。

なお、研究のアプローチとしては、3.で、実践者（行田）が実践の概要を報告するとともに、4.で、白井と行田が実践の検証を行い、5.で白井が「主体的・対話的で深い学び」を実現する総合的な学習の時間の「カリキュラム・マネジメント」に与える示唆について考察する。

### 3. 小学校での総合的学習の時間におけるカリキュラム・マネジメントの実践 — 小3「詩のボクシング」の実践を事例として —

#### 実践例『詩のボクシングに挑戦』（全36時間）

##### （1）実践の計画（P）

学級の子どもたちは、話し合いでは「～と同じで」など、関わりながら発言することができている。朝のスピーチではスピーチをする子どもは、「メダルのこと」など、話したいこと、伝えたいことをしっかりと持っている。また、聞いている子どもたちも、質問や感想を述べるができる。しかし、声が小さかったり、本当に伝えたいことがしっかりと伝わっていなかったりする場面がよく見られる。また、友だちに聞こえていないことに気づかないなど、言いつばなしになっている場面が見られることもある。そうした姿を見たとき、自分の気持ちを表わす方法を知らないのではないか、また、伝えようとする相手にしっかりと伝わっているのか意識することができていないのではないかと感じられた。

そこで、自分の思いを伝えるために、多様な方法の中から適切に表現の仕方を選択できるようになってほしいと考えた。また、他者とのかかわりの中で課題や目的意識、相手意識をもって自分の伝えたいことを表現し、それを振り返りながら、またよりよいものを目指して欲しいと願い、以下のような目指す子ども像と研究の仮説と手だてを設定した。

##### ○ 目指す子ども像

- 自分の思いを豊かに表現できる子
- 他者とのかかわりを通して自分の表現や考えを見つめなおし、また動き出す子

##### ○ 研究の仮説と手立て

###### 仮説1

物事を見つめ、その子なりに感じたことや、考えたことを言葉や写真、身体表現などにおきかえ、それを伝える経験を積んでいくことで、自分の思いを豊かに表現できるようになるであろう。



###### 【仮説1について】

- 継続的にコメントを贈り合う活動を取り入れる。
- 発表の場を設定し、自分たちが表現したことに対しての反応をとらえさせる。
- 振り返りを大切にして、次の活動の目標を持たせる。

###### 仮説2

継続的に相互評価活動を取り入れ、相手の思いを受けとめ、自分の活動を振り返らせることで、自分の表現や考え方を見つめなおし、よりよいものを目指して動き出すことができるであろう。



###### 【仮説2について】

- 詩のボクシングを継続して開催し、より良い詩の表現や身体表現の技法を追究させる。
- 詩のボクシングで、発表者、審査員、観客を経験させるなかで、相手の表現のよさをとらえさせる。
- 身近なものを題材にして、一人ひとりの思いを掘り起こし、それを詩や写真に表させる。

### ① 単元について

本単元は、大きく2つの場面によって構成される。前半は1学期に行う『詩のボクシング』、後半は2学期に行なう「写真展」である。1学期の『詩のボクシング』の活動を通して、自分の思いを伝えるための表現する力を育む。3年生だけでなく、6年生との試合や課題詩での大会に、継続して取り組むことで、詩を通して言葉や身体での表現力を高めていきたい。

また2学期は、1学期に身につけた力を活かす場である。自分たちのくらす「N町」の町を題材にして、「N町」への思いを伝える活動を設定する。具体的には、写真を撮影し、そこに詩をつけ一つの作品に仕上げていく。この活動を通して出来上がった作品で、写真展をひらき、地域に発信する。そして、地域の方からの反応をとらえさせることで、子どもたちには自分の表現がどのように届いたかしっかりと受け取り、自分の表現を振り返らせていきたい。

最後に『詩のボクシング』と「写真展」を通して創り上げてきた詩を「N町」という1つの大きな作品にまとめ、表現する場を設定することで、本単元のまとめとしたい。

### ② 単元構想（全36時間）

次頁参照。

### ③ 抽出児について

仮説を検証するために、本実践におけるA児の変容を追う。

A児は、学校へ来ると気持ちのよいあいさつをし、休み時間には友だちと外遊びを楽しむなど、元気な姿の見られる子である。また、給食の終わりの曲が流れ出すと友だちと肩を組んで体を揺すって踊るなど感性豊かな面も見られる。このようなA児だが、授業になると発言をすることがあまりなかったり、体をよじりながら発言をしたりする姿が見られた。そこで、もっと自分の思いに自信をもって表現できるようになって欲しいと願いを持った。感性豊かなA児は『詩のボクシング』や「写真展」に取り組み、のびのびと思いを表現し、それを見ていた人からのメッセージを受け取ることで、表現することの楽しさを感じ、さらに自分を高めようとするのではないかと考えた。

### ④ 『詩のボクシング』について

詩のボクシングは、リングの上で、赤コーナーと青コーナーに分かれて交互に自作の詩を朗読し、どちらが聞き手の心により届いたかを競い合う言葉のスポーツである。つまり、詩のボクシングは発表者だけでなく、観客や審査員など、聞く存在がいなければ成り立たない活動である。この『詩のボクシング』を学習活動に取り入れることで、子どもたちは、自分の伝えようとすることを、聞いている人に語りかけることで、表現する力を身につけることができるようになると思った。また、ゲームの中で勝つために、子どもたちはより表現の仕方を高めようとするのではないかと考えた。



写真1 『詩のボクシング』の一場面

## 単元構想図（全36時間）

### I 「詩のボクシング」に挑戦！（第1～15時）

○3人1組でグループをつくる。「もし、ぼく、私が○○だったら」というテーマで詩をつくり、「詩のボクシング」を体験する。

・恥ずかしかったけど楽しかったよ。



### II 6年生に挑戦！（第16～18時）

○6年生との交流戦を設定する。6年生の表現方法に着目させ、思いを伝えるためには表現方法を改善することの必要性に気づかせ、自分たちの表現方法を振り返る。

### III 課題詩に挑戦（第19～20時）

○表現方法を改善するため、「のはらうた」など、5つの課題詩を用意し、「詩のボクシング」を実施する。同じ詩を使って対戦することで、詩の朗読の仕方や体の使い方など、表現方法を比較する。

・町にはすてきな場所がたくさんあるね。



### IV 町の写真を撮ってみよう（第21～23時）

○自分のお気に入りの場所やものを撮り、詩をつける。撮影した写真に詩をつけ、作品に仕上げ、相互評価をする。

・たくさんの人が見に来てくれて嬉しかったよ。

### V わくわく写真展をひらこう（第24～30時）

○市民館に作品を掲示し、写真展を開催する。来てくれた地域の方に写真展の趣旨や作品の説明をし、おもてなしをする。また、参観者にはアンケートをお願いし、作品に対する感想をもらう。



### VI 学習発表会で「町」の詩を発表しよう（第31～36時）

○グループをつくり、地元「N町」の詩をつくり、学習発表会で発表する。

## (2) 実践の実際 (D)

### I 「詩のボクシング」に挑戦!

#### (I) 『詩のボクシング』って?

4月の終わり、総合のオリエンテーションを行なった。『詩のボクシング』とスクリーンに出た途端、「ガビン」、「えー」など様々な反応が見られたが、具体的にイメージさせるため、福岡県での小学生の試合及び、本校6年生が昨年度取り組んだ試合のビデオを鑑賞した。子どもたちは、ビデオがはじまると、「赤のがいい」、「いや青の勝ちだな」と判定をし出した。6年生が出てくると、「頑張れ!」など声援をおくったり、試合が終わると拍手をしたり、だんだん反応が出てきた。ビデオを見終わってから授業参観で試合をすることを伝えると「えー」、「やだー」と大合唱がおこった。しかし、「6年生と戦ってみたい」など前向きな声も聞こえてきた。

オリエンテーションを終え、チーム決めを行った。本学級は39名(男子21名、女子18名)。チームは3人(一部4人)を基本とし、12チームにわかれた。くじ引きで決めるため、男女の人数比率などは関係なく組まれる。A児は男子2人、女子1人の班となった。班も決まり、いよいよ大会にむけて詩の創作にはいる。「テーマ」は「もし ぼく、私が〇〇だったら」である。子どもたちはとまどいながらも詩を書き、発表の練習を行った。

#### (II) 『詩のボクシング』をやってみよう

初めての試合当日は、授業参観ということもあり、子どもたちは「恥ずかしい」、「緊張する」などつぶやきながらも試合を楽しみにする様子が見られた。

A児の班はB児が欠席をしたため、2人で朗読を行った。A児とC児は「落ち葉」の詩を発表したが、ファイルを持ち、書いてあることを読んでいだけの発表となってしまう、敗退してしまった。A児はこの日の振り返りに、「まけたけどいいきもち」と綴っている。負けたものの、自分の思いを語り、聞いてもらえたことに満足する様子が伺えた。

第2試合(敗者復活戦)にむけた作品づくりと練習の時間に、A児は「りんご」という詩をつくった。第1試合の詩よりも長く、1人で1つの作品を朗読する作戦をとった。自分にかかる責任も大きくなるが、「B児がうまくいったらかちまちがいなしです」と試合前に綴り、自信をうかがわせていた。

#### (III) 2回戦

2回戦でのA児は1回戦とは異なり、ファイルを見ずに発表した。「みんな」というところで左から右に手をまわしたり、「しあわせだなー」で左右に体をゆすったりするなど、身体表現も多く見られた。また、班の友だちと協力して表現をしようとする姿も見られた。これは1回戦で勝ったチームの多くが「動作を取り入れていたこと」、「大きな声で発表していたこと」の2つのポイントを意識していたためである。A児たちがねらったように試合後、審査員から、「動きがあつてよかった」、「声が大きくてよかった」など、動きと声の大きさを評価された。2回戦では彼らなりに1回戦の反省を生かし、課題をもって取り組むことができた。

#### (Ⅳ) コメントシート

『詩のボクシング』の試合では審査員、観客になった子どもは、コメントシートを書くことになっている。コメントシートには、発表を聞いて「よかったところ、まねしたいところ」、「パワーアップするためにひつようなこと」の2つの項目を4分間で書く。A児は審査員として書いたコメントには、良さを表現するのに「おもしろかった」という言葉ですませているため、朱書きによって「なぜおもしろかったの」と問いかけ、その理由をきちんと説明できる力をつけてほしいと願った。また、コメントの内容を深めさせていくことで、言葉と動きのつながりなど、より細かい表現に気づかせることができると考えた。

#### (Ⅴ) 6年生の試合を見学しよう

3年生の『詩のボクシング』大会を進めながら、子どもたちに6年生が『詩のボクシング』の大会を始めたことを伝えると、「見たい」、「いつやってるの?」と強い興味を示した。「6時間目だよ」と伝えると、帰り際に体育館の窓から一生懸命のぞく子どもの姿が見られた。次の日、試合を覗いていた子どもたちに感想を求めると、「おもしろかった」、「戦ってみたい」といった意見が出された。「6年生と戦ってみたいかい?」と聞くと、「勝てるかなあ」など、不安がる意見も出たが、挑戦してみようということになった。そこで、みんなで見学に行くことにした。

6年生の試合が始まると、A児は6年生の発表を食い入るように見入っていた。試合後の感想には、「とめてとめてのどうさの手をひねるところがおもしろかった」と綴り、一つひとつの言葉や動作に着目し6年生の表現の良さを具体的に見つけることができた。子どもたちからは、「やっぱり6年生は強い」、「すごくおもしろかったからもっと見たい」という意見が聞かれた。

#### (Ⅵ) 3回戦

6年生の試合を見てからは、「早く戦いたい」、「もっと強くなるぞ」と意欲的な言葉も多く聞かれ、ますます『詩のボクシング』への取り組みが活発になってきた。3回戦（敗者復活戦最終試合）では、寝転がったり、「あっちー」というところで下のように飛び上がったり、友だちが以前やった動きを取り入れたりするなど、A児は、今までより豊かな表現を取り入れ、試合に臨むことができた。

こうした変容は6年生の大きな表現や、表情のある声などを見学したことが大きく影響していると考えられる。子どもたちのコメントにおいても、「Aくんの「あっちー」がおもしろかったです」と表現を工夫したところが高く評価された。これらのコメントによってA児は自分の表現の良さを実感することができた。その後、A児のチームは優勝を果たす。

### Ⅱ・Ⅲ 6年生に挑戦!・課題詩に挑戦

確かな表現を身につけるため、『詩のボクシング』の活動は、6年生との対戦、課題詩への挑戦と1学期間継続して行った。

#### (Ⅰ) 6年生との試合

6年生対3年生の試合では、新しくチームを組み直し、A児は女子2人と組んだ。また、目的

に応じた表現の工夫を追求させたいと願い、ここでは「好きです」「嫌いです」「詩のボクシング」「勉強」の4つのテーマをあらかじめ設定した。よりゲーム性を出し、チャレンジしていこうとする気持ちを高めるため、テーマは抽選で決めた。A児のグループのテーマは「詩のボクシング」になった。6年生との対戦でA児は、「緊張する」という言葉に合わせ体をこわばらせるなど、言葉のイメージに合わせた身体表現が多く見られた。

試合後のコメントでは、「雨は本当に太陽がきれいなんだなと思いました」、「Aくんの『雨対晴れをやらせてくれ。そうじゃないとあそべなくしてやるぞ』というところが心に残りました」とA児の表現を取り上げる子どもが多くいた。これらのコメントから、A児の思いや伝えたい気持ちが、聞いている子どもたちに伝わるようになってきたことがわかる。また、6年生との試合を聞いたときA児はコメントシートに、「ふるいことばをりようしてはっぴょうするのがくふうしてあるなと思いました」と綴った。「ふるいことばをりようして」とあるように、第1回大会のときよりも具体的に良さをとらえることができるようになってきている。

## (Ⅱ) 課題詩への挑戦

6年生との対戦を終え、子どもたちに感想を聞いてみた。やはり「6年生は強い」という意見も出たが、「トレーニングをしてもう一度戦いたい」といった意見が多く出てきた。そこでもう一度6年生に挑戦するためのトレーニング大会を行なうこととした。ここでは、試合ごとに詩をつくってきた今までのやり方を改め、課題詩を与え、同じ詩で競わせることにした。これにより、課題詩を解決しながら、暗記したり動作を考えたり、一つひとつの言葉にこだわる時間とすることができると考えたためである。課題詩は5つの詩を与え、その中から1つを選択させた。A児たちの班は「うさぎ」の詩を選択した。「はねても」や「とんでも」など動作を多く取り入れやすい詩と考えて選んだようである。

この試合でA児は、「うさぎにうまれて」というところで寝転がって生まれたところを表現しようとするなど、これまでよりもさらに大きな動作を行っていた。また、A児の班では、前後の隊形を入れ替わったり、動作と朗読の役割を交代したりするなど、今まで見られなかったチームでの表現方法を考え出すことができた。

1学期に取り組んだ『詩のボクシング』の振り返りでは、「6年生ともう1回戦いたい」、「トレーニングをしたから今なら6年生に勝てるかもしれない」など、多くの子どもたちが6年生へのリベンジを希望していた。しかし、リベンジの前にきちんと物事を見つめ、それを表現する力をつけた上で6年生に挑みたいと考えた。課題詩でトレーニングをしたのは一つ一つの言葉を大切にさせたいと考えたからである。それを活かし、詩の内容でも自分の思いをもっと表現できるようになってほしいと願いを持った。そこで写真を使い、題材を絞ることで、より自分の思いを引き出すことができるのではないかと考え、N町の写真をとり、それに詩をつける活動を2学期から取り組むことにした。

夏休みにまず担任が撮影した学校の床や運動場の石などの写真に詩をつけた暑中見舞いの葉書を子どもたちに送った。2学期のはじめ、届いた暑中見舞いを黒板に貼り付けた。葉書を見た子

どもたちは、「どこを撮ったの？」など、写真に興味を示し始めた。そこで、9月の半ばから毎日交代でデジタルカメラをもって、N町の中で自分のお気に入りの場所やモノを撮ることにした。おしろ山、マンホールなど、いろいろな写真が出てきた。A児は手で描いたホームベースの写真をとってきた。この写真からは、A児にとって野球が大切なものであることがしっかりと伝わってくる。この写真を撮影した理由を説明することで、友だちにA児の思いが伝わると考え、撮影した理由を書き、一つの作品として仕上げた。できあがった作品を『スモールワーク』と呼ぶことにした。

#### Ⅳ・Ⅴ 町の写真を撮ってみよう・わくわく写真展をひらこう

##### (Ⅰ) 『スモールワーク』づくり

撮影した理由をA児は、「ぼくはそれをなんかいいもつかつてきたからいいものだと思う」と綴った。友だちと野球をすることを楽しんでいる様子や、手作りホームベースに込めた自分の思いをしっかりと書いている。『スモールワーク』が完成したところで、友だちと作品を見合う時間をとった。その際、友だちの作品にコメントをつけさせた。A児の作品にはコメントが寄せられた。コメントには、「やきゅうがすきなんだね」など、A児の思いに寄り添う言葉が書き込まれていた。コメントをもらった感想を書かせたところ、A児は「自分のことをいっているからよくつたわる」と綴り、友だちからのコメントにより、自分の思いが伝わった喜びを感じている。

##### (Ⅱ) 「写真展」を開こう

全員の写真を見た感想を聞くと、「きれいな写真がいっぱいある」、「もっとたくさんの人に見てもらいたい」など、自分たちの写真の素晴らしさに気づき、表現したい思いが見られた。「いい写真がいっぱいあるから写真展を開いて見てもらえるといいね」と言うと、「ウインディアホールにかざってもらえば」、「公民館だっけかざってもらえるかもしれないよ」などの意見が出てきた。「自分たちでお願いに行ったり、飾ったりできるところでないとダメだよ」と言うと、「公民館ならきっと大丈夫じゃん」と話がまとまり、お願いに行くと、快く許可をしてくださった。

そこで、どんな写真展にしたいか話し合った。子どもたちからは、「2000人くらいの人に来てほしい」、「N町のよさやみんなの思いをつたえたい」、など、たくさんの意見が出された。さらに、出てきた意見を実現するための方法を話し合うと、「ちらしで宣伝しよう」、「ポスターをつくって貼ってもらおう」など、次々とアイデアが出てきた。

次の日に公民館を全員で下見し、どんなものが必要か話し合った。話し合いの中では、「写真展の名前が必要だよ」、「アンケートを入れる箱があるよ」など具体的な意見が出された。開催日は、学級集会の日（11月3日）とした。また、「来てくれたお客さんに感謝の気持ちを伝えたい」という意見が出され、「楽しんでもらうためにも何かやりたい」と最終日におもてなしをして喜んでもらおうということになった。

##### (Ⅲ) 『ビックワーク』づくり

「写真展」にむけ、作品づくりに取りかかった。撮影した写真を拡大し、詩をつけ作品とした

ものを『ピックワーク』と呼ぶことにした。作品をつくるにあたり、1対1での対話を通して、A児が本当に伝えたい思いを引き出したいと考えた。

A児に「野球をやっていて一番うれしいのは、どんな時か考えて書いてごらん」とアドバイスをした。また、詩が完成する度に本当に伝えたいことか対話を通して確認した。そして詩を完成させた。詩の中には、「よっしあ」とあり、ランニングホームランを打ったときのA児の喜びがしっかりと伝わってくる。

また、作品づくりと並行して宣伝のためのちらしをつくり、各家庭に配布した。「写真展」の名前は子どもたちからアイデアを募集し、「写真展」がスタートした。「写真展」がスタートしてすぐに、公民館の館長さんから「写真が素晴らしいから1週間と言わず、11月の終わりまで飾れないかね」と言われた。さらに、地域の人にも見てもらいたいからと写真展の情報を公民館だよりに掲載してくださった。期間延長のお願いや、公民館だよりのことを伝えると、子どもたちは大喜びし、『おもてなしタイム』は公民館に人が入りきらないかもしれないねなど、『おもてなしタイム』に向けて意欲がますます高まっていった。

『おもてなしタイム』の係としてA児は説明係を選び、説明原稿を書いた。写真展が開催されるまでの経緯の説明だけでなく、「ゆっくりしてってください」など、お客さんへの気づかひも見られる。事前の練習では、友だちにお客さん役をやってもらい練習をしていた。はじめは、メモを見てばかりだったが、練習を重ね、だんだん相手を見ることができてきた。

#### (Ⅳ) 『おもてなしタイム』

『おもてなしタイム』当日は、たくさんの人が訪れ大盛況となった。A児は「説明係が少ないから大変」と疲れを見せていたが、最後まで自分から積極的に声をかけ、説明をしようとする姿が見られた。『おもてなしタイム』後の感想には、「ほめられたからかんぺきとはいえないと思うけどうまくできた」と綴り、お客さんからほめられたことで、説明が伝わったことを確認することができ、表現することに対して自信を持つことができるようになってきたA児の成長を見て取れる。

#### (Ⅴ) 写真展が終わって

写真展が終わり、アンケート用紙を回収しに行ったところ100枚以上入っており、子どもたちはその数に驚いていた。アンケート用紙には、「自分の気持ちを表現したり言葉にするとということが少しづつうまくなってきましたね」など、保護者や地域の方々からの、成長を認める言葉がたくさん書かれていた。

この声を子どもたちに届けたいと考え、コメントを一覧に打ち出し、配布した。子どもたちはコメントの数を数えたり、一つひとつ確認するように読み出した。ゆっくりと読む時間をとり、感想を書かせると、A児は「こめんともたくさんもらったから三学きにはもっとと感じました」と綴った。地域の人たちが自分たちの写真や詩に感動したことに喜びを感じ、自分たちの作品の良さを確認することができ、さらなる活動に取り組もうとする姿が見られた。「もっとコメントがもらいたい」という意見は多くの子どもたちにも見られたため、3学期にどうしたら地域の

方々からコメントがたくさんもらえるか話し合った。子どもたちの多くは、「おもてなしタイムをあと5回やる」、「学習発表会で写真展をやる」など、かかわることや見てもらうことを強く希望していた。そこで、学習発表会で、『詩のボクシング』と「写真展」を組み合わせた表現活動をし、表現する力をさらに高めようと考えた。

## VI 学習発表会で町の詩を発表しよう

### (I) 仲間わけをしよう

「みんなが見つけたN町のいいところを学習発表会で発表してみようか」と言うと、「写真展に来た人もたくさんいるから同じのじゃだめだよ」という意見が出てきた。そこで、「みんなの詩をくっつけたら「N町」の詩ができないかな」と言うと、「難しそう」などのつぶやきが聞かれたが、取り組んでみることにした。

まず、「写真展」の作品の内容に合わせ、グループをつくり、グループごとに詩を1つにまとめた。A児たちは「野球の練習」という詩をつくった。作品にはA児の詩の特徴である、音による表現が生かされていた。

### (II) 表現方法を考えよう

全てのグループの詩が完成し、つなぎの言葉を入れ、「N町」というオリジナル作品が完成した。練習時間を設定すると、A児は素早く練習に取りかかった。この時間の振り返りにA児は、「詩のボクシングでやったようにやればかんたんだ」と綴った。A児は、1学期の詩のボクシングを通して身体や声で表現する方法を身につけ、選択することができるようになっていたため、振り返りには自信ある記述が見られた。

### (3) 実践の評価 (C)

本実践の成果として、以下の二点を挙げることができる。

第一に、A児の表現や詩に対する考え方の変化をあげることができる。具体的には、『詩のボクシング』の試合を重ね、相手の表現をしっかりとらえ、それを自分の表現に取り入れていくことで手を広げたり、飛び跳ねたり、寝転がったり、班の友だちと協力して動いたりするなど、身体を使った表現が豊かになっていた。また、自由詩やテーマ詩、課題詩、写真や写真に添える詩など、様々な表現方法を体感させ、表現させることで、のびのびと自分の思いを伝えることができるようになってきた。さらに、テーマや題材を絞り詩を創作することで、自分の思いを豊かに表現できるようになってきた。1、2学期を振り返った感想にA児は、「2学期になってやるときもちのつたわるしになってきました」と綴っており、詩の内容が自分の思いを伝えられるものになってきたと自分の表現の変化を自覚することができた。

第二に、『詩のボクシング』では、コメントにより声や動作の大きさなどを認められたりすることで、声や動作を大きく表現したり、声に表情をつけたりするなど工夫しようとする姿が見られた。また、写真展では、地域の方々が感動したことをコメントによりとらえさせることで、自

分たちの表現に自信を持つことができ、さらに地域へ発信し、コメントを求めようとする姿が見られた。

本実践の課題として、以下の二点を挙げることができる。

第一に、詩を暗記したり、練習をしたりする時間をしっかりと確保することができず、不十分な状態で『詩のボクシング』をすることもあったため、さらに表現を考えたり、練ったりすることができたのではないかとということが課題として残った。

第二に、『詩のボクシング』における相互評価が「声の抑揚」や、「細かい動き」の良さまでしつかりととらえきれていない場面も多々見られたことが課題として残った。もし、質の高い相互評価ができれば表現はさらに高まっていったのではないかと考えている。

#### (4) 実践の改善 (A)

本実践では、『詩のボクシング』や「写真展」の活動を単元の中で取り入れたことで、子どもたちは楽しみながら、自分の思いを表現することができるようになった。今後も地域の人との関わりを大切に学習に取り組ませていく必要がある。そのような実践への評価から、小学校での総合的な学習の時間では、「カリキュラム・マネジメント」において、「基礎・基本」を大切に、「生きてはたらく力」を育むことに留意する必要があると考えた。「基礎・基本」や「生きてはたらく力」については、図1のように考えた。

図1のような「基礎・基本」や「生きてはたらく力」に留意して、小学校での総合的な学習の時間の「カリキュラム・マネジメント」を行う必要がある。その際には、体験的な学習に配慮しつつ「探究的」に学習をすすめることや、教科を横断する学習となるようにするとともに共同的な態度を育むことが重要であると考えられるようになった。

## 総合的な学習の時間におけるカリキュラム・マネジメントにあたって

### ○「基礎・基本」

総合的な学習の時間は、変化の激しい現代社会に対応する資質や能力を育てることをねらいとしている。そのため、教科の枠にとらわれることなく、次のような資質・能力の育成に努めていくことが求められる。

- ・ 学び方やものの考え方を身につける。
- ・ 自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を身につける。
- ・ 問題解決や探究活動に主体的、創造的、共同的にとりくむ態度を養う。
- ・ 自己の生き方を考えることができるようにする。

### ○「生きてはたらく力」

総合的な学習の時間では、「生きてはたらく力」を育むために、教科を横断する総合的な学習となるようにするとともに、体験的な学習に配慮しつつ、探究的に学習をすすめることと、共同的な態度を育てることをめざしている。そのために、地域や各校の特色などをふまえ、創意工夫のあるカリキュラムを編成する必要がある。

また、体験学習をもとにした課題の設定、その解決のために追究していく学習、まとめや発表を通して表現方法の工夫や、言語活動にも力を入れていくことが必要である。

図1 総合的な学習の時間におけるカリキュラム・マネジメントにあたっての基本的な考え

## 4. 小学校での総合的な学習の時間において主体的・対話的で深い学びを実現するために

### (1) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けて

本稿では、小3「詩のボクシング」の実践を事例として取り上げ、実践の検証を通じて、小学校での総合的な学習の時間における「主体的・対話的で深い学び」の実現のために配慮すべき視点について考察してきた。実践事例の中の主体的・対話的で深い学びを実現した子どもの姿について、実践者（行田）は、次のようにまとめている。

自分の思いを伝えるための活動として、『詩のボクシング』や「写真展」に取り組んだA児。活動を通じて、自分の思いを伝えるための表現する力を育てていった。『詩のボクシング』の大会は3年生だけでなく、6年生との試合も実施され、大会を通じて、自分の表現の未熟さや、新たな表現方法にも気づいていった。課題詩による大会では、同じ詩で差をつけるために、動きを入れるなど、表現に工夫が見られるようになった。「写真展」では、保護者や地域の方々からの反応をとらえることで、自分の表現がどのように届いたか振り返ることができた。

このような子どもの姿から導き出される、学級担任レベルで配慮すべき指導上の留意点は、以下の二点である。

第一に、表現力を高める指導の工夫を行っていくことである。実践では、「継続的にコメントを贈り合う活動を取り入れる」「発表の場を設定し、自分たちが表現したことに対する反応をとらえさせる」「振り返りを大切に、次の活動の目標を持たせる」といった手だてが有効であったことが検証された。このような表現力を高める指導の工夫は、「深い学び」を実現するためにも重要なポイントとなる。

第二に、子どもの実態に応じた課題設定を行う必要があることである。「詩のボクシング」では、6年生との試合を実施し、新たな課題を設定することで、自分の表現の未熟さや、新たな表現方法にも気づいていった。課題詩による大会を開催したことにより、同じ詩で差をつけるために、動きを入れるなど、表現を工夫して行うようになった。「写真展」では、保護者や地域の方々思いをわかりやすく伝えようとし、自分の表現を振り返ることにつながった。このようなことから、子どもの実態に応じた課題設定の工夫が、「深い学び」の実現のためにも必要となってくることを示される。

以上のような視点に留意して、学級担任としての教師は、小学校での総合的な学習の時間における指導の手だての工夫や、子どもの実態に応じた課題設定に取り組んでいく必要があるだろう。

## (2) カリキュラム・マネジメントの方略

また、実践の検証を通じて明らかになった、小学校での総合的な学習の時間における「カリキュラム・マネジメント」の方略について、実践者（行田）は、次のように述べている。

『詩のボクシング』の活動では、学級での対戦、課題詩での対戦、6年生を相手にした対戦の場を設定し、それぞれの活動で自分なりの課題をもち、思いを伝えるための表現する力を育ませていった。また、自分たちの暮らす町「N町」を題材にして、地域の「N町」への思いを伝える活動を設定した。自分の好きな「N町」の場所やモノの写真を撮影し、そこに詩をつけ一つの作品に仕上げさせた。出来上がった作品で、「写真展」を開き、地域に発信させた。そして、地域の方からの反応をとらえることで、自分の表現がどのように届いたか振り返らせた。最後に『詩のボクシング』と「写真展」を通して創り上げてきた詩を「N町」という1つの大きな作品にまとめさせ、学習発表会で表現させた。

このような事例から導き出される、学級担任レベルで配慮すべき「カリキュラム・マネジメント」の視点は、以下の二点である。

第一に、PDCAサイクルの中でも、Pの段階サイクルを重視した「カリキュラム・デザイン」<sup>12</sup>に取り組んでいくことである。計画の段階で、「詩のボクシングを継続して開催し、より良い詩の表現や身体表現の技法を追究させる」「詩のボクシングで、発表者、審査員、観客を経験させ

るなかで、相手の表現のよさをとらえさせる」「身近なものを題材にして、一人ひとりの思いを掘り起こし、それを詩や写真に表させる」といった仮説を立てたことが、本実践において有効であった。実践者は、教科を横断する総合的な学習となるようにするとともに、体験的な学習に配慮しつつ、探究的に学習をすすめることと、共同的な態度を育てることをめざしている。そのために、「地域や各校の特色などをふまえ、創意工夫のあるカリキュラムを編成する必要がある」と考え、カリキュラム編成を行っていったという。

第二に、教科を通じて育まれる「基礎・基本」や「生きてはたらく力」と、総合的な学習の時間において育まれる力との「連関性」<sup>13</sup>について考察を深めていくことである。実践事例の中の子どもたちは、非常に活動的であった。『詩のボクシング』の活動では、相手に自分の思いをわかりやすく伝えるために、身体表現などの表現方法を工夫していった。「写真展」の活動では、自分の好きな「N町」の場所やモノの写真を撮影し、そこに詩をつけ一つの作品に仕上げた。出来上がった作品で、「写真展」を開き、地域に発信していった。『詩のボクシング』と「写真展」を通して創り上げてきた詩を、「N町」という1つの大きな作品にまとめ、学習発表会で表現していった。このようなダイナミックな活動の場を保障してやるのが、「基礎・基本」や「生きてはたらく力」の活用のためにも重要であろう。

以上のような視点に留意して、学級担任としての教師は、小学校での総合的な学習の時間における「カリキュラム・マネジメント」に取り組んでいく必要があるだろう。

## 5. おわりに

新学習指導要領で示された総合的な学習の時間でめざす「社会に開かれた教育課程」「育成を目指す資質・能力」「アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善」「主体的・対話的で深い学び」「カリキュラム・マネジメント」に向けて、学校教育現場では、早急に対応する必要性に迫られている。しかし、それらの具体的な教育行為の有効性や課題についての検証が十分進んでいない理論的状況もある<sup>14</sup>。

筆者らは、今後も具体的な実践事例に即して、総合的な学習の時間における「主体的・対話的で深い学び」や「カリキュラム・マネジメント」についての検証を進めていく必要があると考えている。そのためには、過去の総合的な学習の時間の優れた教育実践の掘り起こしを継続的に行い、それらが果たしや役割や意義について、多様なアプローチによる分析を蓄積していくことが重要である。

### 【注】

本稿の執筆分担は以下の通り、1～2：白井、3：行田、4：白井と行田の共著、5：白井

## 【引用文献】

- <sup>1</sup> 今次の学習指導要領の改訂においても学習形態や対象ごとに、「総合学習」「総合的な学習」「総合的な学習の時間」「総合的な探究の時間」等の表記が混在している。本稿では、学習指導要領の答申にしたがい、全て「総合的な学習の時間」に統一して表記した。
- <sup>2</sup> 小学校での総合的な学習の時間において「深い学び」を問うことの重要性については、以下の報告を参照。白井克尚（2018）「アクティブ・ラーニングの視点を問うー小・中・高・大学で『主体的・対話的で深い学び』を育むためにー」『愛知東邦大学地域創造研究所所報』No.23, 愛知東邦大学地域創造研究所、3～4頁。
- <sup>3</sup> 池野範男（2017）『「資質・能力」の育成と『教科の本質』：社会』日本教育方法学会編『教育方法46 学習指導要領の改定に関する教育方法的検討ー「資質・能力」と「教科の本質」をめぐるー』図書文化。
- <sup>4</sup> スティーブン・J・ソーントン著、渡部竜也、山田秀和、田中伸、堀田論訳（2012）『教師のゲートキーピングー主体的な学習を生む社会科カリキュラムに向けて』春秋社。
- <sup>5</sup> 例えば、社会科教育におけるカリキュラム・マネジメントに関しては、以下の図書を参照。須本良夫・田中伸編著（2017）『社会科教育におけるカリキュラム・マネジメントーゴールを基盤とした実践及び教員養成のインストラクションー』梓出版社。
- <sup>6</sup> 文部科学省（2018）『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編ー平成29年7月』東洋館出版社、8頁。
- <sup>7</sup> 前掲『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編ー平成29年7月』、35～46頁。
- <sup>8</sup> 田村知子編著（2011）『実践 カリキュラムマネジメント』ぎょうせい。田村は、「カリキュラム」と「マネジメント」を一体にして捉えようとする立場から、「カリキュラムマネジメント」という用語を用いている。本稿では、学習指導要領の答申にしたがい、全て「カリキュラム・マネジメント」に統一して表記した。
- <sup>9</sup> 学級担任レベルでの「カリキュラム・マネジメント」に関する研究として以下のようなものがある。江口慎一（2006）「学級担任レベルでのカリキュラムマネジメントによる分析」村川雅弘・酒井達哉編著『総合的な学習 充実化戦略のすべて』日本文教出版。
- <sup>10</sup> 行田臣「教育課程編成への指針 総合学習」第67次教育研究愛知県集会『レポート集 2017』愛知教職員組合連合会。
- <sup>11</sup> 愛知県三河地域では、抽出児としての子どもをとらえ、願いをかけるといった実践が伝統的に取り組まれている。例えば、新教科創設期における生活科の授業づくりに関しては、以下の論文を参照。白井克尚（2018）「新教科創設期における生活科の授業づくりに関する研究ー愛知県宝飯郡御津町立御津南部小学校の開発研究を事例としてー」日本教科教育学会編『日本教科教育学会誌』第40巻4号、1～11頁。
- <sup>12</sup> 田村学編著、横浜市黒船の会著（2017）『生活・総合「深い学び」のカリキュラム・デザイン』東洋館出版社等を参照。
- <sup>13</sup> 中留武昭・曾我悦子（2015）『カリキュラムマネジメントの新たな挑戦ー総合的な学習における関連性と協働性に焦点をあててー』教育開発研究所等を参照。
- <sup>14</sup> 小針誠（2018）『アクティブラーニングー学校教育の理想と現実』講談社現代新書。

受理日 平成30年3月20日